
その演劇部、最前線——

自由暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その演劇部、最前線――

【Nコード】

N0272Z

【作者名】

自由暇人

【あらすじ】

主人公『如月奏月』は、とある事情から山々に囲まれた『白萩学園』にやってきた。が、そこは個々の抱く信念が武器や超能力となつて現れる場所だった。

そして起きる爆発。そこに現れた男になされるがままに連れられて、やってきたのは……演劇部部室！？

1人の少年から始まる学園バトルコメディ――、開幕！！

プロローグ「オペレーション・リクルート」前編

白萩学園

周りを山々に囲まれて存在している、広大な敷地を持つ『学園』である

この場所には、少々おかしい所がある

——人の曲げない思いが、能力として具現化する——

武器として具現する事もあれば、事象として現れる場合もある

そして未開のそれを、当然のごとく教師達は恐れた

十分に凶器となりうるものを、生徒が自由に振るえるのだから

だから学園側は、対策を用意した

『生徒に信念を持たせない程、教育すればいい
さすれば、秩序は保たれる』

誰かのその発言は、瞬く間に教師陣への救いの言葉として広まった

そして、創立より15年

ほんの少しの例外を残しながら、学園は平穏へと向かっている――

さっきまでいた部屋が、爆炎に包まれる。

ほんの数メートル後ろの光景が、赤と黒に変わる。

前を走る男に連れ出された理由が、なんとなく分かった。

理解しても、俺はただ走るしかなかった。

走って、後ろの脅威から逃げることはできなかった。

「つたく、生徒会」の連中もやることがえげつなくなってきたなあ……………」

先に行く男が悪態をついている。

『センプーイ、そんな愚痴はいいですから、とつとそこから脱出してください』

「テキトーだなあおい！！ ワンコ、お前それでも司令官か！？」

『まあまあ。そこはどうでもいいんで、とつと”転校生”を安全に連れて来てくださいね』

「作戦無しでかよ！！」

さっきもらった通信機から声がしている、が。

…………… しかし随分とまあ、悠長にやってるなあ……………。

これって一応、学園への反逆ってことだろ？

しかも捕まるとヤバいって、資料に書いてあったような気が……………。

てか、こうしている間にも後ろからは追手みたいなのが来てるし。多分、さっき部屋を爆破したのもあいつなんだろうなあ。きちんと髪を揃えて、メガネかけて、いかにも優秀な学生ですって顔してやがるのに、やることはえげつない……………。

「止まれ！悪ガキ共！！」

ほらね、追手だった。

自分が燃やした部屋の事なんて気にとめてないご様子だ。

「おっと”転校生”、後ろ振り向くなよ。教育に悪い事で定評の

ある副会長様だ」

「聞こえているぞ、反逆者!!」

怒声が聞こえる。

後ろにいる副会長様とやはらは、やはりというかなんというか……
…酷くご立腹なご様子だった。

「ところでお前さ、運動神経に自信はあるか？」

それは前を走る男から俺に向けられた、唐突な質問だった。

「は？まあ、一応それなりに………」

「じゃ、いけるか」

答えてすぐに、質問者は唱える。

「突貫突破乾坤一擲!!——トランス！」

活発な声で叫ぶとともに、現状に2つ、変化が起きた。

1つは、

「這え、火蛇^{ほのお}!!」

炎が音無く地面を伝って蛇のように迫ってきた事。

数は4つ。

それぞれがそれぞれの軌道を持ち、走っていた俺達に追いつか
ばかりの速度で迫ってくる。

こちらは真面目副会長の”能力”だろう。

もう1つは、俺の横にいるヤンキー君の腕に、

「パイル、バンカー………か？」

人の右腕に付く代物ではないとは思うが、そうとは思えなかつ
た。

槍のような先端。

それと不釣り合いな巨大な胴体。

こんな構造をしている武器は、経験上パイルバンカー以外に思い
浮かばなかった。

それが何もない所から腕に装着されていく………、いや。腕の上

に構築されていくのも、随分と不思議な光景だった。

……なるほど、これが”能力”ってやつか。

俺の人生で一度もそんなものを見たことが無かったのは、ただの偶然か、当然か。

それだけ非常識な光景が、この場所には広がっていた。

「プチ込んでくぜー!!」

掛け声とともに、彼の腕に創造された能力が向かった先は、地面だった。

コンクリートに軽くヒビが入る。

と、そこへ。

「砕けー!!」

破砕機は音を立て、二度目の衝撃を送る。

コンクリートの塊は罅を広げて行き、そしていとも簡単に俺達の周りの地面は崩れ落ちる。

蛇のように伝ってきていた炎も、伝う地が無くては行き場を失うだろう。

そこまでは理解できる。

それを計算して地面を落とすのも、まあそれなりに利口的な判断なのだろう。

が……

「っおおおおおおおいいいいいいいい!!!!!!」

建物の二階から一階へ自由落下、それもいきなり。

空中へ放り出される俺と、ヤンキー能力者。

が、取る行動は自然と似通っていた。

「っよ、つと、つと。ほっ」

俺もそいつも、もちろんというように落ちる瓦礫を使って足に負担をかけないように着地。

漫画とかによく出てきそうな、しかし実際には難しいであろうことを、普通であるかのようにしてしまう。

……運動神経良ければ出来る、ってレベルのものなのか?これ。

いや自分が出来てるからなんとも言えないが。

ちなみに、向こうの馬鹿は右手のそのせいで随分と不格好な動きになっていた。（それでも瓦礫渡りは出来るのだからはたまたましいのだろうが）

「……………おいおい”転校生”、お前何者だよ」

「……………ただ運動神経がいいだけの転校生ですよ」

「嘘こけ。普通の転校生にあそこまで出来るかってーの」

「地面いきなり落としたのはあんたでしょうに……………」

と、場を茶化す会話に、通信機から声が割り込んでくる。

『あの〜センパイ、私さっき『安全に連れてきて』、って……………』

「実力試しだよ、実力試し」

『トオル、さすがに地盤落としてはやり過ぎだと思えますよ』

今までの可愛い声とはまた違う、別の声が入ってくる。

今度は男の声だった。

「あゝ、大先生。すみません。ちょっと焦ってたもんで」

『まあ、それはいいですけど……………立ち止まっている方が危険だ

と、僕は思いますよ』

「「あ……………」」

ふと俺も声をあげてしまった……………

そして、向こうの階段の方から、燃える蛇ほのおが見えた。

俺は隣にいる彼に冗談半分で訊く。

「……………もう一度、地面崩します?」

「何言ってるんだよ、ここ一階だぜ……………」

「ですよねえ……………」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙の後、

「「逃げろー!」」

判断は共に早かった。

初対面の割に、俺はそいつと意気投合していた……………ような気が

する。

が、パイルバンカーなんて代物のせいで俺たちの歩みはさっきより遅く。

「逃がさんぞ！」

向こうの男から来る火蛇ほのおは数も増え、速さも上がっている。

ああ……、本格的にまずいだろ、これ。

俺、こいつらみたいな能力なんて微塵も持っていないぞ……

「おいワンコ！姫はどうしたんだよ！！」

『安心してくださいセンパイ。すぐそこに』

直後、俺たちと炎の間に割り込む影があった。

それは小さな影だった。

白と黒を基調としたゴスロリ風な服装。

それを身を包む小柄な体格。

腰まで伸びる長い黒のストレート髪。

あと両の腕に抱えたネコのぬいぐるみ。

ゆったりとどこからか出てきた彼女は、俺たちを一瞥した後、ゆ

っくりとした動きで炎と対峙する。

対峙する、とは言っても少女と炎。

酷く圧倒的だ。

なので一瞬止めようかとも思ったが、やめておくことにした。

彼女が炎に向けて、静かに袖に隠れた左腕をさしだしたからだ。

一件意味不明な行動、更には自殺行為にも見える行為だが、なん

となく場の流利的に察していた。

そしてその推察は、彼女の静かで透明な声で、確信へと変わっていく。

——— そっか。こいつも、———

「怠惰なる守り手より来たれ、——— トランス」

——— ”能力者”か。

俺はふと、思った。

……なるほど確かに、こいつは姫だ。

この光景を見れば、さつきから彼女が姫と呼ばれる理由をなんとなく察することが出来る。

それは、先程まで地を這い迫ってきた炎。

こちらに向かつてきていたその火は、彼女の前に立った瞬間に恐れをなして消えて行く。

おそらく盾の”能力”であろう。透明な障壁らしきものが見える。その光景はまさに王と賤民のようで、酷く圧倒的だった。

そして俺は理解した。

自分をまるで王のように見せる、小さな女の子。

容姿だけでなくこの能力を持つからこそ、彼女は姫と呼ばれているのだろつ、と。

（ま、彼女があんな容姿じゃ無けりゃ、姫じゃなくて女王とか呼ばれるんだろつけどな）

夢も希望も無い話である。

「くつ……、イレギュラーか！」

向こうはどうやら相当悔しがっている様子で、追撃は諦めたようだ。

「じゃ、急ぐぜ”転校生”！！」

俺たち二人は、姫を置いて『指導練』と書かれた建物の外へと出る。

校舎内に残された二人は、静かに牽制し合っていた。

（さて、どうしたものか）

副会長は思考する。

イレギュラー

彼女の能力は絶対の盾。

炎による攻撃だろつが拳の一撃であろうが、完全に防いでくる。

そのバリアが今、廊下を隔てている。

もしくは、彼女自体立方体が防いでおり、見えないが見える透明な盾は、その一面にすぎないのか。

一面だけならいいが、四方を囲んでいたり立方体だったりしたら厄介だ。

——が、どちらかの判断もつかない。なら……

副会長は右手を後ろ手に構える。

そして一気に、前に広げる！

「燃えろ！！」

彼の掌から、炎の波が発生する。

廊下を覆うほどの火は、まっすぐに目の前の少女に向かっていく。容赦は無い。

（どうせこの攻撃は当たらないんだろうな……、だが！！）

火元の人間はそれを知っている。

が、これが本命ではない。

「穿て、火槍^{ほのお}！！」

左手で作った新たな炎は、槍とも針ともとれる形状であった。

長さは1メートル程だろうか。それが3つ、副会長の背後に現れる。

行け、と指示すると同時、炎はそれぞれまっすぐに窓の外へ向かう。

パリン、と割れる音がして、破片が棟外へと落ちて行く。

が、校舎の損害は気にしない。

破損は気にせず違反者は捕まえろ、というのが教師陣の言い分であつた。

生徒会はただ、それに従う。

（校舎を壊してでも——、）

そのまま何処かへ飛んでいくと思われた火は、空中で静止する。そして向かう先、”能力”の対象が、3つ全て棟内へと変わる。

そう、

（――違反者は捕らえる――！）
中にいる、少女に向かって。
炎が飛ぶ。

ブログ「オペレーション・リクルート」前編（後書き）

初投稿で至らない所多々ありますが、これから宜しく願います！！

感想ご意見などございましたら、レビューとか私のブログに書き込むでも何でもよいので、くれるとありがたいです。

というか募集します！！アドバイスとかくれると、特に感謝です！！

作者ブログ『とある高校の文芸同好会のブログ』

<http://blogs.yahoo.co.jp/crusaidars757>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0272z/>

その演劇部、最前線――

2011年12月1日00時49分発行